

12月19日の事故、皆さんはどう思いますか？

SさんもYさんも、JP会社の被害者ではないのか？

高橋 弘二（JP労組仙台東南支部集配分会）
国井 庄徳（JP労組仙台東南支部普通郵便分会）
神田 広猛（JP労組仙南支部角田分会）
mail:miyagicenter@yahoo.co.jp 2018年1月1日発行

12月19日17時頃、仙台大沢郵便局の集配労働者Yさんが配達途中、道路を横断中のSさんを跳ね死亡させるという事故が発生しました。

私たちは、まず何よりも亡くなられたSさんのご冥福を祈りたいと思います。また、事故を起こしたYさんが、一番胸を痛め、痛苦の思いでいることに心を寄

せたいと思います。

事故は新聞でも報道され、東北支社よりその日のうちに県下の郵便局に周知されました。翌朝のミーティングでも大々的に取り上げられたので、多くの仲間が今回の事故を知り、心を痛めているのではないのでしょうか。

『安全の確認を！』と会社が叫べば、 本当に事故は無くなりますか？

この事故に対し、JP会社東北支社長は、

①事故の原因は、Yさんのスピード超過と前方不注意の交通ルール違反にある。

②JP社員は「交通事故を他人事と考えていないか！」というメッセージを発しました。

この言葉は、私たち現場労働者が毎日どんな思いで働いているのかを分かった上での言葉でしょうか？

前超勤の更に前から小包の区分けを開始し、次々と請け負業者が撤退し、人員不足が慢性化する中で、飯も食わずに働いているのです。

誰だって事故など起こしたくない。誰だって安全に運転したい。しかし、それが無理なのは、誰もが毎日感じているのではないですか？

それだけではありません。日本郵便常務執行役員の山本龍太郎・安全担当管理者は、

①私は常々「忙しい時、焦っている時ほど、ひと呼吸おく」

②常々「安全第一」と言っているのに、社員は「安全第一」を自分のこととして考えていない。と言いつつ放ったのです。

会社は、事故の責任を、すべてYさんに押しつけると同時に、JP社員全員に「安全第一」の自覚が無いから事故を引き起こすのだ、と言うのです。

会社が『安全第一！』と叫べば、本当に事故はなくなりますか？安全を守りたくとも守れない現場を強制しているのは誰なのでしょう！？

局を出て、100メートル。時速60キロ ・・・みんな経験していることではないですか？

事故後、私たちは現場を見てきました。

大沢郵便局を左折し、100mの県道です。交差するT字路の手前に、薄ぼんやりとした水銀灯が路面を照らしていました。当日と同じ濡れた路面。21時半を過ぎても、大沢郵便局は明かりがついていました。

いま、全国の郵便局で労働時間も何も関係なく働い

ている当たり前の光景です。

事故当日の17時。薄暗い中を3号便の小包や再配達郵便を積み込み、大沢局を左折した後、時間帯指定を気にしながら車を加速させた先に、横断歩道を渡る被害者のSさんがいたのです。

局の中では「安全確認」。しかし、局を出た瞬間に、

誰もが焦る気持ちになります。

あっという間に60キロ。

配達指定時間内に到底終わらない個数があり、「まだ届かない！」とドライバーコールが鳴る。客が怒っ

ているのがわかる。

いつ、誰が、飛び出してもおかしくない細い路地を60*で突っ走ってしまう。誰もが、経験していることではないでしょうか？

やはり、起きてしまった！

ひょっとしたら自分だったかもしれない！

会社は「時間帯配達が遅れるときは、お客様に断りの電話を」「配達日・時間帯指定のないものは翌日に回して良い」と言います。

しかし、そんなことをしている余裕はありません。

ヤマトも佐川も断ったアマゾンの膨大な配達物を引き受け、現場は配達能力をはるかに超えた業務量を押しつけられている。

次の日に回された小包の山は、いったい誰が配達するのですか？

だから、局を出て、急加速する。突っ走る。22時過ぎに仕事が終わりに、部屋に帰って一息ついたとき、「何で、あんな運転をしてしまったのか？」と怖くなります。事故がなかったのは『たまたまだ』と。

いつか誰か、取り返しのつかない事故を起こすのではないか。みんな、肌で直感しながら運転してきた。

そして、やはり起きてしまった！ ひょっとしたら、自分だったかも知れない。Yさんは、私であり、あなたではないでしょうか。

今のまま働いていたら、

次のYさんが出るのではないですか？

事故は、会社の労働条件が引き起こした。亡くなったSさんも、Yさんも、同じ会社の被害者です。

今のまま働いていたら、次のYさんが出るのではないですか。

職場の安全と労働者の命は、「命よりも金」の会社とたたかって初めて守ることができます。

「事故の責任は労働者の交通ルール違反」という会社と同じ立場に立つのではなく、こういうときにこそ、職場の仲間を守るのが、本当の労働組合ではないでしょ

うか？

仲間が職場で自殺に追い込まれても、事故が起きても、組合が黙っていれば、忘れられてしまいます。どれほど多くの仲間が、悔しい思いをしてきたことか。

いまのJP労組を、会社の言いなりではなく、滅茶苦茶な労働条件を強制する会社とたたかう労働組合に変えていこう。労働者の命と安全を守る労働組合を、みんなの力で作りだそう！ みなさんは、どう考えますか？ ぜひ、ご意見・連絡をお願いします。

事故を知った職場の仲間の声

- ありのままを書いたら、改ざんせざるを得ない乗務記録簿など意味があるのか？
- 交通事故を起こす要因は、あくまでの出発後の無理な個数、箇所数での焦りを生むことが原因であって、出勤前の点呼や体操の指の角度など、どうたらこうたらは直接関係がない。
論点をずらすな！
- 休暇をとる暇がない。
- 誰もが出発時は安全運転を心がけるが、交通ルールを守っていたら間に合わない。
- 本当に事故の原因、要因を知りたかったら、まったく同じ条件で、会社は仕事してみろ。暖房の効いた部屋で、100回事故事例やるより効果的だ。
- 民間を参考にするとおきながら、その民間の佐川、クロネコが採算に合わないと、ぶん投げたアマゾンに食い付くとは何たる矛盾！ 組合に出来ることは無いのか。
- 事故は一度起きたら立て続けに起きる理由は簡単。事故が起きるたびに無能な当局が意味のない施策を打ち出して、配達時間をさらに削り、余計に焦りを生むからだ。点呼の長蛇の列が出来るという本末転倒。